翻訳

s

異形の文字の　すべらかな起伏と
膜にはじめて触れたとき
毟った蔓のような　奇妙な姿は
蜜に富んだ匂いがした
紀元前の頭頂から滑る背と腰
または　とある皮膚にて発見された
傷であったか　伝い出る流線の誕生を
幸い　誰も覚えていない

x

小さな部屋の水晶をともすと
重ねられた　骨の接点に
定義が漂い始めている
噛み合わせの悪い含意から
油の臭いが立ち込め
燻る衝動に　繋ぎ目が疼きだす
市場へと食いしばる輪郭を獲得し
かの腫れを喪失しながら

鋭利になっていく　訳してよ
私は躊躇する　標的に
空輸される先端の切れ味は
声をあげてから　飛沫を噴くのだ

e

換気の唇がくわえる　耳の裏道
不織布を剥ぐと　湿った牙が並んでいた
月のような　久しい目を
迂回しながら　照る
粒子の細毛になだらかな
頬の膨らみへと接近し　伸びた手首を
焦点でこすると波がたつ
管を秘めた柔らかさに被さる
指の丸みが　明るく眠っていた
語彙を当てていくと
私達は　ばらけていって
今にもいなくなるかと思えた

t

歯の隙間から蝮が浮かぶ
しかし　あなたは深みから

私を掴み　引き戻す
摩耗した指紋を　円匙のかたちに寄せて
喉元から剣状突起まで裂いていく
熱の奥にこそ　秩序があった
結びの鳴る胸板　這っていた生命線が
厳かに埋めていく　境界
呼ばれてはならないよ　誰からも
沈黙が　入れかわりながら
新たな姿勢をつくる

i

私達の字体は　翻っている
離れた胴は　発音の届かない領分を
未だに跨いでいた
息が地温を引っかけて
跳ね返ってくる　から　吐き　吸う
部位が取りこぼされるたびに
すくい上げる　どこまでも　異形
手つかずのまどろみ　道もない
生まれたばかりの起伏にて